The QUALITAS

Interview 403

株式会社ハイパーラーニング

代表取締役 **高橋 和義**

子どもの非認知能力を伸ばす教育のパイオニア。

当社は宮城県仙台市と名取市でそれぞれ教育塾を展開しています。勉強にお悩みの方から志望校を突破したい方まで徹底サポートし、小学生から高校生まで対象に始動しています。今期からは、子どもの非認知能力を向上させる教育にも注力しています。非認知能力はまだまだ教育業界の中でも取り組まれている会社が少ない中、弊社が先陣を切り、この東北から教育のパイオニアたる存在になりたいと思います。

東北から起業家となる人材の輩出を目指す

世の中の表裏を知り、生き方を選ぶ

仙台市立仙台商業高等学校卒業。2010 年に個人事業主として起業し、2012 年にさくら株式会社を設立。2023 年に鳶工事業を手掛ける株式会社三和鋼産を設立。同年に水処理設備工事会社の株式会社ユニーを買収。ハイパーラーニングの代表取締役就任、教育事業に進出。

―― 高橋代表はこれまでも地元の宮城県で子どもの教育のためにさまざまなお取り組みをされてきたそうですね。

「CEO キッズアカデミー」で未来の起業家を育てる教育事業を行ってきました。「知っていること」と「やったことがあること」では、子どもたちの将来に与える影響や選択肢の多さに大きな差が出ると考え、各団体さんたちと協力しながら「宮城スマイルプロジェクト」を立ち上げました。こども店長体験などさまざまな職業体験を通して、子どもが自分の将来のイメージを持てるようなイベントを行ってきました。

―― 非認知能力を育てることを重視されているそうですが、何かきっかけはあるのでしょうか。

非認知能力はやり抜く力やコミュニケーション力など、数字で測ることが難しい能力のことを言います。社会で生きていくために非常に大切な能力で、この能力が将来の成功にまで結びついてくるものです。私の周囲の経営者の方々を見ても、学力とはまた違う能力で経営手腕を発揮されている方が多くいらっしゃいます。日本の学校で学ぶことと、社会に出てから求められることの乖離があることを常々感じていましたので、その架け橋をつくりたいと思ったことがきっかけですね。

―― 非認知能力を開花させるために、普段の生活の中でできることはあるのでしょうか？

普段の生活の中で触れるものに対して視点を切り替えることだと思います。例えばラーメンを食べるにしても、これ一杯を作るのに何カ国・何千人の人が関わっているのかを知ってほしいのです。「これはどこからどうやって自分の前にきたのだろう？」と考えるなど、自分の生活の中の様々な部分に疑問を持ち、自分と世界の接点を見つけることが大切だと思います。

―― 今の子どもたちの非認知能力はどうでしょう？ 育ちやすい環境だと思いますか？

なかなか難しい環境だと思います。というのも、今の世の中は情報だけは無数に摂取できますが、経験する機会が少ないのです。自分で経験して、嬉しい、悲しいなど感じることが非認知能力の成長に重要だと思います。私自身、圧倒的に経験してためになったと思うのは「怖い」という感情です。そういう感情を経て、「社会に出たら騙されることもあるかもしれない」程度の警戒心は多少持ちながら社会人になったと思います。今の子どもたちは家庭でも学校でも怒られる機会が少なく、非常に優しく綺麗なところだけを見せられているように感じます。そのため、学校生活を終え、社会に出たときの環境の差に危機感を抱いています。

―― 怖い、という感情は確かに普段の生活ではなかなか感じにくいですね。

社会貢献活動を続けられているアルピニストの野口健さんがインタビューで話されていたのですが、野口さんのお父様は外交官で、小学生の野口さんを治安の良くないスラム街や野戦病院に連れていっていたそうです。野口さんがなぜこんなところに連れてくるんだと聞いたら、「世の中にはA面とB面があるんだ。放っておいても見えてくるのがA面で、自分から行かないと見えないのがB面である。得てして世の中のテーマはB面にあるから、おまえもあちこち行くなら、B面を見ろ」と言われたそうです。私はその経験が今の野口さんに繋がっているのだと思いました。きれいに加工されていないB面も見て、自分の生き方を決めていくことが大事だと思います。社会に出てからギャップを感じて挫折することなく、自分を信じて生きていけるような学びの場を弊社がつくっていきたいと思います。

―― 東北から新しい教育を広げていくにあたり、展望を教えてください！

東北の方は良くも悪くも真面目過ぎる人が多く、起業家が少ないのもその気質が少からず影響していると感じています。東北から子どもたちの非認知能力を伸ばす教育を行い、リーダーシップのある子どもを増やしていきたいですね。当塾でも国語や算数といった科目と同じように非認知能力の授業を選択して学ぶことができるようにしていきます。多くの子たちが非認知能力を伸ばせる機会を持てるように、今後も注力していきます。

https://www.hyperlearning.jp/

KAZUYOSHI TAKAHASHI